

讀白氏文集記

花房英樹

與元九書

月日、居易白、微之足下、

本文は、元和四年に那波道圓が刊行した白氏文集に據る。文苑英華に收める所の此の文には、月字の上に某字がある。制作の時期については、岑仲勉「論白氏長慶集源流并評東洋本白集」に、「約元和十年至十二年所作。」と見えるが、胡適白話文學史に、「此書作于白居易在江州、元稹在通州時、但無正確年月、約在元和十年。」とあり、更に康熙四十二年に汪立名が編訂した白香山詩集に載せる、陳振孫白文公年譜には、元和十年の條に、「臘月有與元九書。」と見える。本文の末に「如今年春、遊城南時、與足下馬上相戲、因各誦新艷小律、」といひ、「足下左轉、不數月而僕又纒行、」といひ、「潯陽臘月、江風苦寒、」という語に據れば、元和十年十二月に疑うべきものはない。陳氏のいう所を確説とする。元稹「酬樂天東南行詩一百韻」の原注に、「樂天八月之江州、」とあるように、その八月、白居易は太子左贊善大夫より江州司馬に遷されていたのである。事は文集「與楊虞卿書」及び舊唐書本

傳に詳かである。時に年四十四。微之は題にいう元九の字。名は稹。その「酬樂天東南行詩」の序に、「元和十年三月二十五日、予司馬通州、二十九日、與樂天於鄂東蒲池村別、」とあるから、當時通州司馬に貶せられていた。足下の語は、文選李少卿「答蘇武書」にも「子卿足下」と見え、李善注に「蔡邕獨斷曰、陛下者、羣臣與至尊言、不敢指斥天子、故呼在陛下者而告之、因卑達尊之意也、及羣臣庶士、相與言殿下閣下足下侍者執事之屬、皆此類也、」とある。なお五臣注には「良曰、子卿蘇武字、古人貴呼其字者、字所以表德也、」と。

自足下謫江陵至于今、凡枉贈答詩僅百篇、文集「和答詩十首序」に、「五年春、微之從東臺來、不數日、又左轉爲江陵士曹掾、」と見え、又、元稹「酬樂天東南行詩」の原注に「九年、予從事唐州也、」とあり、趙德麟侯鯖錄「微之年譜」にも、「辛卯至甲午九年 是歲徙唐州從事、」と。元稹は元和五年に江陵に謫せられ、後に唐州從事となり、やがて十年正月に京師に召還されたが、再び通州に出されたのである。その間五年餘。枉字、英華は同じい。蓬左文庫所藏の、嘉靖十七年に刊行された伍忠光校本は所に作り、萬曆

三十四年刊行の馬元調校本は伍本に従い、全唐文もまた馬本に倣う。

胡適文存「跋宋刻白氏文集影本」に、瞿氏藏本影片と此の本とを對校

して異を掲げぬ。枉字を以つて舊と定める。章應物「答長寧令楊轍」

にも、「短才何足數、枉贈媿妍詞、」という用例がある。僅字、英華の

みに作るが、周必大等の、南宋集本との校語に、「集作僅」とある。

僅を優るとする。僅字のこの用法は文集に屢々見え、「傷唐衢」にも、

「遺文僅千首、六義無差忘、」とある。段玉裁說文解字注には、「唐

人文字、僅多訓庶幾之幾、如杜詩山城僅百層、韓文初守睢陽時、士卒

僅萬人、又家累僅三十口、柳文自古賢人才士、被謗議不能自明者、僅

以百數、元微之文、封章諫草、繁委箱笥、僅逾百軸、」と。杜詩は「泊

岳陽城下」、韓文は「張中丞傳後敘」、與李翺書」、柳文は「寄許京兆

孟容書」、元微之文は詩題。

僕既受足下詩、又諭足下此意、常欲承答來旨、粗論歌詩大端、

受字、英華は愛に作る。上下の文を顧れば受が是である。全唐文の英

華に従うのは非。承答の語は文選曹子建「求通親親表」に、「承答聖

問、拾遺左右、」と。粗字、馬本に始めて麤に作る。盧文昭羣書拾補

に、主として海虞葛氏影宋鈔本に據る馬本の校正があるが、麤を棄て

粗を採り、「案二字不同、俗本凡粗俱改爲麤、誤、」と。しかし二字

は通用。以後この類は問われない。大端の語は禮記禮運の「禮義也者、

人之大端也、」に始まる。

牽故少暇、間有容隙、或欲爲之、又自思所陳、亦無出足下之見、

有字、英華校語に「一作苦」と。苦に作るは誤。出字、伍本馬本全唐

文にはない。立野春節が馬本に據つて菅家の舊點を施した明曆三年刊

本には、此の那波本に據つて出字を傍に補う。盧氏校正にも馬本の誤

脱をいう。ないものは非。

臨紙復罷者數回、卒不能成就其志、

復字、英華校語に「一本作自字」と。復を以つて長とする。回字、神

田先生藏の朝鮮本は四に作る。那波本はこの朝鮮本の覆刻であり、し

かも蓬左文庫所藏の細井平洲澤手本と傳えられる那波本に記入された

校語に、本邦所傳の舊本は四に作ると稱するから、此に回に作るの

は、校正ではなく上梓の際の誤りと認め、四に改むべきものとする。

卒字、馬本始めて率に作り、全唐文また馬本に従う。盧氏校正は卒。

盧說に従う。細井本校語に舊本は年に作ると。恐らくは譌字。

因覽足下去通州日、所留新舊文二十六軸、開卷得意、忽如會面、

元稹「敘詩寄樂天書」に、「自十六時、至是元和七年矣、有詩八百餘

首、色類相從、共成十體、凡二十卷、自笑冗亂、亦不復置之於行李、

昨來京師、偶在篋篋、及通行、盡置足下、」と。此に二十六軸とは、

彼の二十卷を主として、元稹の通州到任直後に整理し、「敘詩」と

いうその詩卷の、白居易に送られたものを加えていうものであろう。

會面二字、英華に倒する。校語には「一作會面」と。上句より考える

と會面が順である。又、文集には屢々會面は見えるが、面會の例はな

い。

既而憤悻之氣、思有所洩、遂追就前志、勉爲此書、足下幸試爲僕留意一

省、

文選成公子安「嘯賦」に、「舒蓄思之悱憤、奮久結之纏綿、」とあり、

李善注に「論語、子曰、不憤不啓、不悱不發、」と。論語は述而。爲

僕留意四字、英華は留志爲僕に作り、校語に「集作爲僕留意」と。  
夫文尙矣、三才各有文、

文集策林「議文章」には「易曰、觀乎人文、以化成天下、記曰、文王以文理、則文之用大矣哉、」ともある。此この注脚と認めてよい。易は周易賁象、記は禮記祭法。周易繫辭下に「易之爲書也、廣大悉備、有天道焉、有人道焉、有地道焉、兼三材而兩之、故六、六者非宅也、三材之道也、道變動、故曰爻、爻有等、故曰物、物相雜、故曰文、」と。こうした考え方は既に隋書文學傳序にも見え、更に遡れば劉勰文心雕龍原道に見える。

天之文、三光首之、地之文、五材首之、  
三光は文選班孟堅「東都賦」に、「三光宣精、五行布序、」とあり、李善注に「淮南子曰、夫道統宇宙而章三光、高誘曰、三光日月星也、」と。淮南子は原道訓、五材は文選沈休文「齊安陸昭王碑文」に、慧與八風俱翔、德與五材並運、」とあり、李善注に「左氏傳、子罕曰、天生五材、民竝用之、」と。左氏傳は襄二十七年。杜預注に「金木水火土、」と。このような觀念は、檀德輿「贊皇文獻公季公文集序」、張懷瓘「文字論」にも見えるが、文心雕龍原道には、「日月疊璧、以垂麗天之象、山川煥綺、以鋪地理之形、」とあり、范文瀾注に「易離卦象辭、日月麗乎天、百穀草木麗乎土、」「易上繫辭、仰以觀於天文、俯以察於地理、」と。

人之文、六經首之、就六經言、詩又首之、  
六經は文選魏文帝「興梁朝歌令吳質書」に「妙思六經、逍遙百氏、」とあり、李善注に「莊子、孔子謂老聃曰、丘治詩書禮樂易春秋六經、

自以爲久矣、」と。莊子は天運。北齊書文苑傳序に「聖達之言、化成天下、人文也、」とあり、文心雕龍宗經にも「經也者、恒久之至道、不刊之鴻教也、」と。斯波先生范注補正には「杜預春秋經傳集解序、左丘明受經於仲尼、以爲經者不刊之書也、」と。詩又首之とは、史記孔子世家に、「三百五篇、孔子皆弦歌之、以求合韶武雅頌之音、禮樂自此可得而述、以備王道成六藝、」と見え、禮記經解に六經を説いてその第一に列するが、毛詩序には「正得失、動天地、感鬼神、莫近於詩、」と。

何者、聖人感人心、而天下和平、  
二句は周易咸象の文。下字、英華は地に作る。ただし内閣文庫所藏の明鈔本は下に作る。以後英華を掲げるのは、明鈔本に據る校正である。

詩者、根情苗言、華聲實義、  
郭紹虞中國文學批評史に、「因詩序『發乎情、止乎禮義』之語、而謂根情實義；又因詩序『發言爲詩』及『情發於聲』諸語而謂苗言華聲。」と。なお根苗という發想は、文集「讀張籍古樂府詩」に、「言者志之苗、行者文之根、」と見える。

上自賢聖、下至愚賤、微及豚魚、幽及鬼神、  
賢聖二字、全唐文は誤倒。愚賤は北史宗室傳にも「帝大怒詔曰、阿倪愚賤、誰引爲郎、」とある。周易中孚象に「信及豚魚、」と。鬼神は前引毛詩序に見える。

群分而氣同、形異而情一、  
分字、英華は飛に作り、校語に「集作分」と。分を穩とする。周易繫

辭上に「方以類聚、物以羣分」と。又、乾文言に「同聲相應、同氣相求」と。下句はそれに似た文字が劉知幾史通模擬にも見えるが、呂氏春秋仲春情欲に「萬物之形雖異、其情一體也」とある。二句の觀念は、文集百道判「得乙聞牛鳴」に、「形雖異類、心則同歸」ともあるから、周易繫辭下「天下同歸而殊塗」に本づくものであろう。

因其言、經之以六義、緣其聲、緯之以五音、毛詩序に「詩有六義焉、一曰風、二曰雅、三曰頌、四曰賦、五曰比、六曰興」と。なお經は六に應じる語。淮南子原道訓に「音之數不過五、而五音之變、不可勝聽也」とあり、高誘注に「宮商角徵羽也」と。緯は五に應じる語。

於是乎孕大含深、貫微洞密、下句は魏文帝「彈棊賦」に、「苞上智之弘略、允貫微而洞幽」ともあるが、上句と共に本づく所を詳かにしない。後考を待つ。

上下通而一氣泰、憂樂合而百志熙、一字、瞿氏藏宋刊舊唐書本傳（百衲本による）所引の文は二に作る。盧氏校正に「文粹作二」と稱するが、唐文粹には此の文を収めていないから、「文粹」は舊唐書の筆誤かも知れぬ。周易泰彖「天地交而萬物通也、上下交而其志同也」に本づくものであるから、一を以つて優るとする。尙書大禹謨に「百志惟熙」と。

五帝三皇、所以直道而行、垂拱而理者、五帝三皇四字、舊唐書英華は俱に二帝三王に作る。ただ英華二字の下の校語に「集作五」と。下文より推せば二帝三王が順である。姑く傳本の舊に従つて改むべきものとする。文選楊子雲「羽獵賦」に、「昔

在二帝三王」と見え、李善注に「應劭曰、堯舜夏殷周也、春秋說題辭曰、尙書者二帝之迹、三王之義」と。論語衛靈公に「斯民也、三代之所以直道而行也」と。尙書武成に「垂拱而天下治」と。理字は高宗の諱を避けたもの。

揭此以爲大柄、決此以爲大寶、禮記禮運に「禮者君之大柄也」と。寶字、舊唐書は寶に作り、全唐文また之に従う。盧氏校正は舊唐書により寶を採る。胡適文存に、單不庵は此の本と全唐文とを對校し、寶に従うべしとする。案ずるに盧說が是である。英華六三季益「詩有六藝賦」に「是人情之大寶、未有不由於斯者」とも見える。本づく所は、禮記禮運「禮義也者、所以達天道、順人情之大寶也」

故聞元首明股肱良之歌、則知虞道昌矣、聞五子洛汭之歌、則知夏政荒矣、尙書虞書益稷に「元首明哉、股肱良哉、庶事康哉」と。又、夏書に五子之歌がある。その序に「太康失邦、昆弟五人、須于洛汭、作五子之歌」と。

言者無罪、聞者作戒、言者聞者、莫不兩盡其心焉、作字は、全唐文は足に作り、毛詩序「言之者無罪、聞之者足以戒」に合せる。劉統嶽舊唐書校勘記に「按此用詩序語、當從全唐文」と見え、單不庵また「當從全唐文」というが、必ずしも改めるを要せぬ。毛詩召南小星の序に「知其命有貴賤、能盡其心矣」と。

洎周衰秦興、採詩官廢、元續「工部員外郎杜君墓係銘序」に、「秦漢以還、採詩之官既廢」ともある。本づく所は、漢書藝文志「古有采詩之官、王者所以觀風

俗、知得失、自考正也、孔子純取周詩、上采殷、下取魯、凡三百五篇、遭秦而全者、以其諷誦不獨在竹帛故也、」なお禮記王制に「命大師陳詩、以觀民風、」とあり、鄭玄注に「陳詩謂采其詩而視之、」ともいふ。

上不以詩補察時政、下不以歌洩導人情、

左氏傳襄十四年に「善則賞之、過則匡之、患則救之、失則革之、自王以下、各有父兄子弟、以補察其政、」と。洩導の語は倒して、昭明太子「請停吳興丁役疏」に「開漕溝渠、導泄震澤、」ともある。洩は太宗の諱を避けたもの。

乃至於詔成之風動、救失之道缺、

乃字、舊唐書は用。盧氏校正も用。文義を案ずるに強いて改める要はない。詔成の語は詳かにせぬ。恐らくは文集新樂府「采詩官」にいう「贊君美」の意。救失は漢書鼂錯傳に「救主之失、補主之過、」と。赤字の下に、馬本のみ「丘月切」という音注があるが、馬氏校本元氏長慶集凡例に、「集中難字、舊無注釋、今擇其稍僻、不爲衆所共曉者、略標反切、并明其義焉、」というものと定め、以下盡く之を去る。

國風變爲騷辭、五言始於蘇李、

鍾嶸詩品序に「逮漢李陵、始著五言之目矣、」とあり、任昉文章緣起には「五言詩、創于漢騎都尉李陵與蘇武詩、」と見える。

蘇李騷人、皆不過者、

蘇李騷人四字、舊唐書は詩騷二字に作る。上下の文を顧みるに、詩騷に作るは誤。騷人は昭明太子「文選序」に「騷人之文、自茲而作、」と。不遇は毛詩柏舟序に「仁人不遇、小人在側、」と。

故河梁之句、止於傷別、澤畔之吟、歸于怨思、

文選李少卿「與蘇武詩」に、「携手上河梁、遊子暮何之、徘徊路側、悵悵不能辭、」と。楚辭漁父に、「屈原既放、游於江潭、行吟澤畔、顏色憔悴、形容枯槁、」と。王逸序には「在江湘之間、憂愁嘆吟、」と。彷徨抑鬱、不可及他耳、

抑鬱の本づく所は、漢書司馬遷傳「獨抑鬱而無誰語、」ただし文選司馬子長「報任少卿書」では「鬱悒」に作る。可字、朝鮮本は同じい。ただし、その朝鮮本の據る、圖書寮所藏の成化二十一年「新鑄字跋」が附せられる（朝鮮）銅活字本には、この文を補寫するが、そこでは明かに暇字に作る。補寫は同じ銅活字本によるものと認められるから、朝鮮本に始まる誤をこの那波本が承けたものである。暇に改むべきである。

然去詩未遠、梗槩尚存、

元稹「杜君墓係銘序」に「騷人作而怨憤之態繁、然猶去風雅日近、尙相比擬、」とも。文心雕龍辨騷には「豈去聖之未遠、而楚人之多才乎、」と。

故興離別、則引雙鳧一雁爲喻、諷君子小人、則香草惡鳥爲比、

庾信「哀江南賦」に「李陵之雙鳧永去、蘇武之一雁空飛、」と。據る所は、古文苑にも見える蘇武「別李陵」の「雙鳧俱北飛、一鳧獨南翔、」王逸「離騷經序」に、「離騷之文、依詩取興、引類譬諭、故善鳥香草、以配忠貞、惡禽臭物、以比讒佞、」と。

猶得風人之什二三焉、

文選「求通親親表」に、「其詩曰、刑于兄弟、以御家邦、是以雍雍穆穆

穆、風人詠之、」と。

于時六義始缺矣、

柳冕「與徐給事論文書」にも「自屈宋已降、爲文者本於哀艷、務於恢誕、亡於比興、失古義矣、」と。

以康樂之奧博、多溺於山水、以淵明之高古、偏放於田園、

宋書謝靈運傳に「靈運少好學、博覽羣書、文章之美、與顏延之、爲江左第一、縱橫俊發、過於延之、深密則不如也、從叔混特知愛之、襲封康樂公、食邑二千戶、以國公例、」と。又、「出爲永嘉太守、郡有山水、靈運素所愛好、出守既不得志、遂肆意游遨、徧歷諸縣、動輒旬朔、」と。宋書隱逸陶潛傳に「陶潛字淵明、」と。淵字、細井本校語に舊本は泉と。英華もまた泉。高祖の諱を避けたのである。本傳には「潛少有高趣、」とも。「歸去來辭」には「歸去來兮、田園將蕪、胡不歸、」と。

江鮑之流、又狹於此、如梁鴻五噫之例者、百無一二焉、于時六義寢微矣、

盧照鄰「南陽公集序」に「精博爽麗顏延之、急病於江鮑之間、」と。

江淹と鮑照の謂である。王通文中子事君にも「鮑照江淹、古之狷者也、其文急以怨、」と。江淹は梁書に、鮑照は宋書に本傳がある。梁

鴻は後漢書逸民に本傳があり、「梁鴻過京師、作五噫之歌、曰、陟彼北芒兮噫、顧覽帝京兮噫、宮室崔嵬兮噫、人之劬勞兮噫、遼遼未央兮噫、肅宗聞而非之、」と。焉字、舊唐書英華にはない。英華校語に「集有焉字」と。寢微は文心雕龍樂府に「自雅聲浸微、溺音騰沸、」

とも。柳冕「與滑州盧大夫論文書」には「魏晉以還、則感聲色而亡風

讀白氏文集記

教、宋齊以下、則感物色而亡興致、」とある。

陵夷矣至梁陳間、率不過嘲風雪弄花草而已、

陵夷は漢書張釋之傳に「秦陵夷、至于二世、天下土崩、」と。矣字、各本にはない。文選劉子駿「移書讓太常博士」に、「陵夷至于暴秦、」と見え、李善注に「漢書、武帝制曰、大道微缺、陵夷至于桀紂之行作、」ともある。各本に従つて矣字を削り、陵夷を下屬して讀む。弄字、英華校語に「一作詠」とあるが、下文より推せば非である。噫、風雪花草之物、三百篇中豈捨之乎、

噫字、舊唐書は意に作る。意は噫の壞字。文選「報任少卿書」に、「詩三百篇、大底聖賢發憤之所爲作也、」とあり、李善注に「論語曰、詩三百、」と。論語は爲政。

設若北風其涼、假風以刺威虐也、雨雪霏霏、因雪以駭征役也、

北風其涼は毛詩邶風北風の文。序に「北風刺虐也、衛國並爲威虐、百姓不親、莫不相攜持而去焉、」と。因雪二字、伍本馬本にはない。

又胡氏は瞿本にないと稱する。立野本は傍に添え、盧氏校正は校増する。案ずるにないものは非。雨雪霏霏は小雅鹿鳴之什采薇の文。序に「采薇遣戍役也、文王之時、西有昆夷之患、北有玁狁之難、以天子之命、命將率、遣戍役、以守衛中國、故歌采薇以遣之、」と。

棠棣之華、感華以諷兄弟也、采采芣苢、美草以樂有子也、

棠棣之華は毛詩小雅鹿鳴之什常棣の文。序に「常棣、燕兄弟也、閔管蔡之失道、故作常棣焉、」と。棠は常の假借。朱師說文段借義證に説がある。文選「求通親親表」に、「中詠棠棣、匪他人誡、」と。五臣注に「翰曰、棠棣詩篇名、刺兄弟不睦也、」と。采采芣苢は周南芣苢

の文。序に「后妃之美也、和平則婦人樂有子也」と。

然則餘霞散成綺、燈江淨如練、離花先委露、別葉乍辭風之付、

上二句は謝世「晚登三山還望京邑」の文。ただし四部本謝宣城詩集及

び文選では淨を靜に作る。文鏡秘府論地卷「論體勢等」及び南卷「論

文意」に引く所は、俱に淨に作つて此に合する。李白「金陵城西樓

月下吟」にも「解道燈江淨如練、令人長憶謝玄暉」とあつて靜には作

らぬ。離字、舊唐書は歸。歸に改むべきものとする。鮑照「翫月城西

門隙中」の文であり、四部本鮑氏集、玉臺新詠、文選俱に歸に作り、

李善注にも「華落向本、故曰歸」といひ、「翼氏風角曰、木落歸本、

水流歸末」ともいひ。乍字、鮑集玉臺文選俱に早に作る。先の淨字

と共に強いて改めるには及ばない。

于時六義盡去矣、

陳子昂「修竹篇序」にも「僕嘗暇時、觀齊梁間詩、彩麗競繁、而興寄

都絶」と。

所可舉者、陳子昂有感遇詩二十首、鮑防有感興詩十五首、

二字、英華は三。舊唐書文苑陳子昂傳に、「子昂獨苦節讀書、尤善屬

文、初爲感遇詩三十首、京兆司功王適見而驚曰、此子必爲天下文宗

矣、由是知名」と。新唐書本傳には「初爲感遇詩三十八章」と。四

部本陳伯玉文集にも感遇詩三十八首がある。三が是に似るが、元稹

「敘詩寄樂天書」に、「適有人以陳子昂感遇詩相示、吟翫激烈、即日爲

寄思玄子詩二十首」とあるから、當時は二十首として通行していた

とも考えられる。姑く更改を議しない。盧藏用「右拾遺陳子昂集序」

に、「道喪五百歲、而得陳君」と。防字、伍本馬本は同じい。他本

は悉く防に作る。防に改むべきである。英華八九六「工部尙書鮑防

碑」に「公賦感遇十七章、以古之政法、刺譏時病、麗而有則、屬詩

者、宗而誦之、」（全唐文は穆員の名に於いて收録する）とあり、舊唐書本

傳にも「防於詩尤工、有感發以譏切世弊」と。今全唐詩に詩八首を

載せる。中に雜感詩一首がある。下の首字、舊唐書は篇に作る。

又詩之豪者、世稱李杜、

文集「劉白唱和集解」にも「彭城劉夢得詩豪者也」とある。此の句、

細井本に「詩ノ豪者ナリ」「詩ノ豪者ハ」と兩讀する。立野本は前者

に従い、金子彦二郎氏「平安時代文學と白氏文集（道眞の文學研究篇）」

は、下に也字を増して亦之に従う。本邦所傳の舊本に也字の有るもの

があつたとも考えられるが、今その本を見ず、更に文氣より推すも後

者が穩當であるから、一句は上に連ねず下に連ねて讀む。世字、英華

は誤脱。校語にも「集有世」と。新唐書文藝杜甫傳に「少與李白齊

名、時號李杜」と。文集にも「讀李杜集因題卷後」に「吟詠流千古、

聲名動四夷」と。

李之作才矣奇矣、人不逮矣、索其風雅比興、十無一焉、

李字、伍本馬本にはない。胡氏は翟本にはないと稱する。盧氏校正は

補う。立野本に李杜二字を校増するが、李は是であるも杜は衍字。才

矣の矣字、伍本馬本は誤つて巳に作る。杜甫「懷李白」に「白也詩無

敵、飄然思不羣」と。殷璠「河嶽英靈集」に李白を論じて、「其爲文

章、率皆縱逸、至如蜀道難等篇、可謂奇之又奇」と。文集には「李

白墓」に「可憐荒隴窮泉骨、曾有驚天動地文」ともある。劉全白「唐

故翰林學士李君碣記」に「恐古人之善詩者、亦不逮」と。

杜詩最多、可傳者千餘首、至於貫穿今古、觀縷格律、盡工盡善、又過於李、

禮記檀弓上に「禮爲可傳也、爲可繼也、」と。首字、伍本馬本全唐文は篇に作り、瞿本は誤つて人に作る。全唐詩に録するもの約千四百三十首。漢書司馬遷傳贊に「貫穿經傳、馳騁古今、上下數千歲間、斯以勤矣、」と。文選左太仲「吳都賦」に「嗟難得而觀縷、」とあり、李善注に「王延壽王孫賦曰、嗟難得而觀縷、」と。ただし謝靈運「擬太子鄴中集八首」の李善注所引王延壽賦には觀字を羅に作る。高步瀛李注義疏に説がある。格字、馬本に格に作るは譌字。文鏡秘府論南卷「論文意」に、「凡作詩之體、意是格、聲是律、意高則格高、聲辨則律清、格律全、然後始有調、」と。善字、英華は誤つて苦に作る。論語八佾に「子謂韶、盡美矣、又盡善也、謂武、盡美矣、未盡善也、」と。元稹「杜君墓係銘序」に、「至於子美、蓋所謂上薄風騷、下該沈宋、言奪蘇李、氣吞曹劉、掩顔謝之孤高、雜徐庾之流麗、盡得古今之體勢、而兼人人之所獨專矣、」と。又「李尙不能歷其藩翰、況堂奧乎、」と。然撮其新開安石塚瀆關吏、蘆子關花門之章、朱門酒肉臭、路有凍死骨之句、亦不過十三四、

開字、胡氏が異同を掲げぬから、瞿本は此に同じいと察せられるが、舊唐書以下各本にはない。今定めて衍字とする。伍本馬本全唐文は、安塚兩字の下に吏字を増す。盧氏は馬本を是とするに似、單氏は「當從全唐文、」というが、補う必要はない。又、伍本馬本全唐文は、蘆の上に塞字を加え、關字を留に改めて塞蘆子・留花門に作り、今本杜集に合せるが、増損の必要を認めない。尙、瞿本に下の關字を開に

譌する。朱門以下十字は、「自京兆赴奉先縣詠懷五百字」の文。十三四の三字、英華は同じいが、他の諸本悉く三四十に作る。胡氏は瞿本について「雖舊唐書相同、然以文義看來、似以日本本(那波本)作『十三四』爲優。」といい、單氏亦胡説に同じるが、遽には従い難い。神田先生藏の那波本には林靖の校語があり、金澤文庫本は三四十に作ると稱する。計有功唐詩記事、黃徹碧溪詩話に引く所も亦三四十。恐らくは傳本の舊に從つて改めるべきものであらう。伍本馬本全唐文には、十字の下に首字がある。

僕常痛詩道崩壞、忽忽憤發、或食輟哺、夜輟寢、不量才力、欲扶起之、詩道の語は、以前にその例を見ない。恐らくは此に始まるものか。憤字、各本は憤に作る。文集「與昭義軍將士詔」に、「守名節者、憤發於中、」とも見える。譌字と認めて改むべきものとする。論語述而に「發憤忘食、」と。發と憤とは雙聲。食輟哺夜四字、舊唐書は廢食二字に作る。細井本校語に、舊本は夜字を臥に作ると稱する。林本校語にも一本臥に作ると。臥を穩とする。

嗟乎、事有大謬者、又不可一二而言、然亦不能不粗陳於左右、文選「報任少卿書」に、「日夜思竭其不肖之才力、務一心營職、以求親媚於主上、而事乃有大謬不然者夫、」と。又、「僕終已不得舒憤懣、以曉左右、」と。僕始生六七月時、乳母抱弄於書屏下、有指無字之字示僕者、僕雖口未能言、心已默識、

元稹「祭庾太夫人文」に、「抱弄荃蓀、陵蘭始茂、」ともある。無、之の二字、舊唐書は互易。盧氏校正は舊唐書に從う。元稹「白氏長慶



集序」、李商隱「太原白公墓碑」、新唐書本傳、皆舊唐書に同じい。盧說を是として改むべきである。雖字、舊唐書にはない。

則僕宿習之緣、已在文字中矣、

天台智者大師別傳に「宿習開發、煥若華敷矣、」と。文集「故饒州刺史吳府君神道碑銘序」にも「君生四五歲、弄泥沙時、所作戲、輒象道家法事、八九歲、弄筆硯時、所出言、輒類詩家篇章、不自知其然、蓋宿習儒玄之業明矣、」と。

十五六、始知有進士、苦節讀書、二十已來、晝課賦、夜課書、間又課詩、不遑寢息矣、

唐會要貢舉進士に、「(太和八年)十月、禮部奏、進士舉人、自國初以來、試詩賦帖經時務策五道、中間或釐改更、旋即仍舊、」と。息字、英華は食に作る。校語には「集作息」と。此を長とする。

以至于口舌成瘡、手肘成胝、既壯而膚革不豐盈、

口舌成瘡の本づく所は詳かでない。手肘成胝は、文集「悲哉行」では「讀書眼欲暗、秉筆手生胝、」となるが、荀子子道「夙興夜寐、耕耘樹藝、手足胼胝、」に發するものであろう。膚革は禮記禮運に「四體既正、膚革充盈、人之肥也、」と。充盈は文選宋玉「神女賦」に、

「貌豐盈以壯姝兮、苞溫潤之玉顏、」と。

瞥瞥然如飛蠅垂珠在眸子中也、動以萬數、

瞥瞥二字、舊唐書英華は瞥一字に作る(ただし明刻英華は首字を重ねる)。字義を案ずるに瞥字が是に似る。禮記檀弓下には「有餓者、蒙袂輯屨、

質貿然來、」とあり、鄭玄注に「質質、目不明之貌、」とある。釋文に「質又音茂、」ともあり、質皆は同音通用。又、白氏六帖目に「瞥

然」を掲げて孟子を題し、「其心不正、則童子瞥然、瞥音質、」とも見える。孟子は離婁上「曾中不正、則眸子眊焉、」に本づく。也字、舊唐書は者に作る。細井本校語に舊本には者と。林本校語も一本に者と。文氣より推せば者字を順とする。傳本の舊に従つて改むべきとする。

蓋以苦學力文所致、又自悲矣、

舊唐書に、文の下に之字があり、矣字がない。二字があるを穩とする。胡適白話文學史に、矣字を棄てて、又自悲を下屬せしめ、多故までを一句とするが、恐らくは非。今、細井本に従つて讀む。

家貧多故、二十七方從鄉賦、

文集「將之饒州江浦夜泊」に、「苦乏衣食資、遠爲江海游、」といひ、「身病向鄱陽、家貧寄徐州、」ともいふ。陳氏年譜、貞元十五年條下に「是歲舉進士於宣州、試射中正鵠賦、窗中列遠岫詩、」と。又、汪氏年譜に「送侯權秀才序、貞元十五年、爲宣城守所貢、明年予中春官第、凡作二十六二十七者、皆誤也、」と。陳汪兩氏の説はともにしてある。時に年二十八。此に二十七というのは、陳氏の論及する如く「書但云從鄉賦爾、不云及第也、」として止むべきか、或は白居易の筆誤とすべきものである。賦字、英華は試。全唐文また英華に従う。單氏は「當從全唐文、」と。文集「吳郡張公神道碑銘序」にも「既冠、好學能屬文、從鄉賦、登明經第、」とあり、又、唐會要貢舉等にも見える。當時の通語。改めるには及ばない。

及授校書郎時、已盈三四百首、

授字、英華は爲に作る。校語には「集作授」と。授を穩とする。文集

「養竹記」に「貞元十九年春、居易以拔萃選及第、授校書郎、」とある。時に年三十二。

皆謂之工、其實未窺作者之域耳、

陳子昂「上薛令文章啓」に「某寔鄙能、未窺作者、」と。作者は文集

にも、「代書」に「聖人之旨、作者之風、」とあり、「和答詩十首序」

に「言有爲、章有旨、迨於宮律體裁、皆得作者風、」とある。

每與人言、多詢時務、每讀書史、多求理道、始知文章合爲時而著、歌詩

合爲事而作、

詢字、英華は諷に作り、校語には「集作詢」と。理道は禮記樂記に

「審樂以知政、而治道備矣、」と。文集「新樂府序」には、「總而言之、

爲君爲臣爲民爲物爲事而作、不爲文而作也、」ともある。

僕當此日、擢在翰林、身是諫官、手請諫紙、

舊唐書本傳に「(元和)二年十一月、召入翰林爲學士、」と。文集「初

授拾遺獻書」に「(三年)五月八日、翰林學士將士郎守左拾遺居易頓

首頓首、謹昧死奉書於旒屨之下、臣伏奉前月二十八日恩制、除授臣左

拾遺、」と。年三十七。手字、英華伍本馬本は同じいが、舊唐書全唐

文は月に作る。盧氏校正是舊唐書に従う。文集「醉後走筆酬劉五主簿

長句之贈」に、「月慙諫紙二百張、歲愧俸錢三十萬、」とあり、「論制

科人狀」にも「今職爲學士、官是拾遺、日草詔書、月請諫紙、」とあ

る。一は歲、二は日に對し、此この身に對するのと異なるが、いづれも

諫紙を月に繋げる。今、盧説に従つて月に改めるべきものとする。

啓奏之外、有可以救濟人病、裨補時闕、而難於指言者、輒詠歌之、

啓奏之外、胡適白話文學史上屬せしめるが、今一句として讀む。人

讀白氏文集記

病は左氏傳昭二十一年に「民人苦病、夫婦皆誼、」と。裨補は吳志孫權

傳に「孤豈不樂忠言以自裨補邪、」と。時闕は風俗通十反に「周旋進

退、補察時闕、」と。毛詩序に「上以風化下、下以風刺上、主文而諫

諫、」とあり、鄭氏箋に「風化風刺、皆謂譬喻不斥言也、主文、主與

樂之宮商相應也、諷諫、詠歌依違不直諫、」と。文集「與楊虞卿書」

に「凡直奏密啓外、有合方便聞於上者、稍以歌詩導之、意者欲其易入

而深誠也、」ともいう。

欲稍稍遞進聞於上、上以廣宸聰、副憂勤、次以酬恩獎、寒言責、下以復

吾平生之志、

遞字、舊唐書にはない。あるものを順とする。文選傅武仲「舞賦」に

「合場遞進、案次而俟、」と。聰字、舊唐書は聽。聽を櫛とする。文

集策林「請行賞罰以勸學賢」にも「廣其聽、則野無遺賢、」と。勤字、

伍本馬本は誤つて勸に作る。憂勤の語は神田先生「讀白樂天詩記」に

説がある。孟子公孫丑下に「有言責者、不得其言、則去、」と。文集

「東林寺白氏文集記」に「且欲與二林結他生之緣、復冀歲之志也、」

ともある。

凡聞僕賀雨詩、而衆口籍籍、已謂非宜矣、

文集諷諭に「賀雨詩」がある。神田先生「讀白樂天詩記」に詳説があ

る。而字、舊唐書にはない。文集「庾承宣可尙書右丞制」にも「衆口

籍籍、頗爲得人、」とある。衆口は周語に「衆心成城、衆口鑠金、」

と。籍籍は漢書江都易王傳に「國中口語籍籍、」と。顏師古注には

「諠聒之意、」とも見える。已謂二字、舊唐書は以爲に作る。

聞僕哭孔戡詩、衆面脉脉、盡不悅矣、

文集諷諭に「孔戡詩」があり（馬本は「哭孔戡」に作る）、中に「洛陽誰不死、戡死聞長安、我是知戡者、聞之涕泣然、」と。韓愈に「唐朝散大夫贈司勳員外郎孔君嘉誌銘」があり、又、新舊唐書にも本傳がある。文選「古詩十九首」に、「盈盈一水間、脉脉不得語、」と。李善注には「爾雅曰、脉相視也、郭璞曰、脉脉謂相視貌也、」と。

聞秦中吟、則權豪貴近者、相目而變色矣、

文集諷諭に「秦中吟十首」がある。序に「貞元元和之際、予在長安、聞見之間、有足悲者、因直歌其事、命爲秦中吟、」と。變色は史記范雎傳に「是日觀范之見者、羣臣莫不洒然變色易容者、」と。文集「傷唐衢」に「遂作秦中吟、一吟悲一事、貴人皆怪怒、閑人亦非訾、天高未及聞、荊棘生滿地、」ともいふ。

聞樂遊園寄足下詩、則執政柄者扼腕矣、

樂の上、舊唐書英華に登字がある。盧氏校正は據つて補う。盧氏に従つて補うべきものとする。文集諷諭に「登樂遊園望詩」がある。中に「孔生死洛陽、元九謫荆門、可憐南北路、高蓋者何人、」の句がある。又、元稹に「酬樂天登樂遊園見憶」もある。文選陳孔璋「爲袁紹檄豫州」に「趙高執柄、專制朝權、」と。五臣注に「濟曰、柄國之機要也、」とある。戰國策燕に「樊於期偏袒扼腕而進曰、此臣之日夜切齒腐心、」と。

聞宿紫閣村詩、則握軍要者切齒矣、

文集諷諭に「宿紫閣山北村詩」がある。中に「紫衣挾刀斧、草草十餘人、奪我席上酒、掣我盤中飡、」と。又「主人慎勿語、中尉正承恩、」と。軍要は宋書武帝紀にも「裕辭不獲已、遂總軍要、」とある。

不相與者、號爲沽名、號爲詆訐、號爲誦謗、

名字、舊唐書は譽。文集には「陳中師除太常少卿制」等に沽名の用例はあるが、沽譽はない。姑く英華に従つて此を存する。後漢書逸民傳序に「彼雖經釋有類沽名者、然而蟬蛻羣埃之中、」とあり、章懷太子注に「論語、子貢曰、有美玉於斯、蘊而藏諸、求善價而沽諸、孔子曰、沽之哉、沽之哉、我待賈者也、沽謂街賣也、」と。論語は子罕。詆訐は文選左太冲「三都賦序」に「侈言無驗、雖麗非經、而論者莫不詆訐、」と。李善注に「墨子曰、雖有詆訐之人、無所依矣、說文曰、誣訶也、訐面相序罪也（序は當に斥に作るべきである）、」と。墨子は脩身。

苟相與者、則如牛僧孺之戒焉、

文集「和答詩十首序」に「僕思牛僧孺戒、不能示他人、」と。又「論制科人狀」に「右臣伏見内外官近日除改、人心甚驚、遠近之情、不無憂懼、喧喧道路、異口同音、皆云制舉人牛僧孺等三人、以直言時事、恩獎登科、被落第人怨謗加誣、惑亂中外、謂爲誑妄、斥而逐之、故並爲關外官、」と。事は新唐書牛僧孺傳及び通鑑元和三年にも見える。乃至骨肉妻孥、皆以我爲非也、其不我非者、舉世不過三兩人、孥字、英華の奴に作るは壞字。世字、伍本馬本全唐文は誤脫。立野本は校増する。

有鄧魴者、見僕詩而喜、無何而魴死、

下の而字、舊唐書にはない。下文より推してあるものを標とする。文集に「鄧魴張徹落第詩」がある。又「讀鄧魴詩」もあり、中に「未及看姓名、疑是陶潛詩、看名知是君、惻惻令我悲、」といい、「少年無

疾患、溘死於路岐、天不與爵壽、唯與好文詞、」ともいう。  
有唐衢者、見僕詩而泣、未幾而衢死、

文集に「寄唐生詩」があり、中に「唐生者何人、五十寒且飢、不悲口無食、不悲身無衣、所悲忠與義、悲甚則哭之、」と。又「傷唐衢二首」があり、中に「致吾陳杜間、賞愛非常意、」と。韓愈に「贈唐衢」があり、國史補に「唐衢唯善哭」がある。

其餘則足下、足下又十年來困躓若此、

則字、舊唐書は即。足下二字、伍本馬本は重ねない。盧氏校正は重ねる。盧説を是とする。文選鐘士季「檄蜀文」に「困躓冀徐之郊、制命紹布之手、」と。

嗚呼、豈六義四始之風、天將破壞、不可支持耶、

豈は助字辨略に「辭之未定、猶云殆也、」というもの。毛詩序に「一國之事、繫一人之本、謂之風、言天下之事、形四方之風、謂之雅、雅者正也、言王政之所由廢興也、政有大小、故有小雅焉、有大雅焉、頌者美盛之形容、以其成功告於神明者也、是謂四始、詩之至也、」と。論語子罕に「天之將喪斯文也、後死者不得與於斯文也、」と。

然僕又自思關東一男子耳、除讀書屬文外、其他懵然無知、

陳氏年譜に「代宗大曆七年壬子、正月二十日、公始生於鄭州新鄭縣東郭宅、見公自爲墓誌、新鄭公祖鞏縣府君所居也、」と。鞏縣府君の事は、文集「故鞏縣令白府君事狀」に見える。新鄭は河南に在る。故に此に關東という。因に籍望を太原と稱するのは、「事狀」に「及始皇思武安之功、封其子仲於太原、子孫因家焉、故今爲太原人、」という、その故である。一男子の語は「自中書舍人出守杭州」に「太原一

男子、自顧庸且鄙、」ともいう。文の下、英華には之字がある。  
乃至書畫棊博、可以接群居之歡者、一無通曉、

文選曹子建「洛神賦」に「無良媒以接歡兮、托微波而通辭、」と。初應進士中時朝無縹麻之親、達官無半面之舊、

陳氏年譜貞元十六年に「二月十四日、中書舍人高郢下、第四人及第、」と。中時二字朝鮮本は同じいが、銅活字本は時中に作る。林本校語にも、金澤文庫本は時中に作ると稱する。倒するものが是、改めて「初應進士時句中朝無縹麻之親」と讀むべきである。文選左太冲「魏都賦」に「左則中朝有絶、聽政作寢、」とあり、劉淵林注に「中朝内朝也、漢氏大司馬侍中散騎諸吏爲中朝、丞相六百石以下爲外朝也、」と。説は漢書劉輔傳孟康注に見える。韓愈「石鼓歌」にも「中朝大官老於事、」と。儀禮喪服に「縹麻三月、」と。鄭玄注に「縹麻、布裘裳而麻經帶也、不言裘經、略輕服省文、」とあり、疏に「五服之内、輕之極者、」ともいう。半面之舊は文集百道判「得乙貴達」にも「或識纔半面、契來同心、」とあり、白氏六帖面に見える「後漢應奉字世叔、行汝穎、過袁賀門、出半面、不見賀、二十年、路見識之、」に本づく語。六帖の文は後漢書應奉傳章懷太子注及び太平御覽四三二に據れば、謝承後漢書の節文である。

策蹇步於利足之途、張空拳於戰文之場、

蹇步は沈約「讓五兵尚書表」に「醜貌悴容、不藉鑿于溜水、駑馬蹇步、終取墮于監車、」と。利足は荀子勸學に「假輿馬者非利足也、」と。空拳は文選「報任少卿書」に「張空拳、冒白刃、」と。李善注に「李登聲類云、拳或作捲、此言兵已盡、但張空拳以擊耳、」といい、

「顏師古曰、讀爲拳者謬矣、拳則屈指、不當言張、陵時矢盡、故張弩之空弓、非手拳也、李奇曰、拳者弩弓也、」ともいふ。戰文は文集「東南行一百韻」にも「戰文重掉鞅、射策一彎弧、」と。十年之間、三登科第、

元稹「白氏長慶集序」に「樂天一舉擢上第、明年拔萃甲科、」といい、「又登甲科、」という。進士及び拔萃科は前に見える。「又登甲科」とは、陳氏年譜元和元年、「四月、應材識兼茂明於體用科、入第四等、」というもの。文集「垂釣」にも「三登甲乙第、一入承明廬、」と。

名入衆耳、迹升清貫、出交賢俊、入侍冕旒、入字、舊唐書は落。盧氏校正は據つて落を採る。下句の升に對するとすれば落が穩である。迹字、英華は足に作り、校語に「集作跡」と。足は跡の壞字かと疑う。迹跡通用。清貫は資治通鑑元和九年に「文雅可居清貫者、」とあり、史炤釋文に「貫事也、清貫猶清職也、」という。又、廖文英輯正字通貫の下には「侍從之官曰清貫、」と見える。冕旒は文選劉孝標「辨命論」に「譬天王之冕旒、任百官以司職、」と。なお禮記禮器には「天子之冕、朱綠藻、十有二旒、」と。

禮吏部舉選人、多以僕私試賦判傳爲準的、吏字、英華に誤脱。冊府元龜貢舉總序に唐制を述べて「大抵銓選屬吏部、貢舉屬禮部、」と。舉選は韓愈「贈侯喜」にも「半世遄遄就舉選、一名始得紅顏表、」と。私試は文集「靖安北街贈李二十」に「還似往年安福寺、共君私試却廻時、」ともある。國史補「敍進士科舉」に「羣居而賦、謂之私試、」と。傳字、舊唐書にはない。準的は後漢書賈彪

傳に「一言一行、天下以爲準的、」と。元稹「白氏長慶集序」には「性習相近遠、求玄珠、斬白蛇等賦及百道判、新進士競相傳於京師矣、」と。賦は文集卷二十一、判は卷四十九五十の兩卷に在る。僕庶然自愧、不之信也、

説文に「方言、山之東西、自媿曰庶、」と。之字、伍本は乏。形近の譌。及再來長安、又開有軍使高霞寓者、欲娉倡妓、妓大誇曰、我誦得白學士長恨歌、豈同他妓哉、由是增價、

舊唐書本傳に「(元和)六年四月、丁母陳夫人之喪、退居下邳、九年冬入朝、授太子左贊善大夫、」と。國史補「任廸簡呷醋」に「及景略卒、軍中請以爲主自衛佐、拜御史中丞爲軍使、」ともある。高霞寓の傳は新舊唐書に載せて在る。學士とは張籍にも「寄白學士」があり、嘗つて翰林學士であつた爲にいう。長恨歌は文集卷十二歌行曲引に見える。他妓の妓、舊唐書にはない。

又足下書云、到通州日、見江館柱間有題僕詩者、復何人哉、元稹に「見樂天詩」があり、「通州到日日平西、江館無人虎印泥、忽向破簷殘漏處、見君詩在柱題心、」と。又、文集には「微之到通州日、授館未安、見塵壁間、有數行字、讀之、卽僕舊詩、其落句云、淥水紅蓮一朵開、千花百草無顏色、然不知題者何人也、微之吟歎不足、因綴一章、兼錄僕詩本同寄、其詩乃是十五年前初及第時、贈長安妓人阿歡絕句、緬思往事、杳若夢中、懷舊感今、因酬長句、」と。復字、舊唐書にはない。

又昨過漢南日、適遇主人集衆樂娛他賓、

文集「送馮舍人閣老往襄陽」に「莫戀漢南風光好、峴山花盡早歸來、」と。漢南は襄陽という。文選曹子建「與楊德祖書」にも「仲宣獨步于漢南、孔璋鷹揚于河朔、」と。江州への途上、「襄陽舟中」「再到襄陽訪問舊居」等がある。「襄州別駕府君事狀」には「貞元十年五月二十八日、終於襄陽官舍、」と見えるが、この襄陽別駕であつた父の季庚とともに、居易は嘗つて此に住していた。樂娛二字、舊唐書英華に倒する。倒するものが穩。

此誠雕蟲之戲、不足爲多、

蟲字、舊唐書英華は篆。林本細井本校語にも一本は篆と。ただし英華校語には「集作蟲」と。盧氏校正は篆。裴子野に「雕蟲論」等はあるが、今は傳本の舊に従つて改むべきものとする。文選王簡栖「頭陀寺碑文」に「敢寓言于彫篆、庶髣髴乎衆妙、」と。李善注に「法言曰、吾子少好賦、曰、然、童子雕蟲篆刻、」と。法言は吾子。李軌注に「彫蟲篆刻、少年之事、壯夫不爲、悔作之也、」とも見える。

雖前賢如淵雲者、前輩如李杜者、亦不能忘情於其間哉、

前字、英華に然に作るのは誤。文選江文通「別賦」に「雖淵雲之墨妙、嚴樂之筆精、」と。李善注に「淵王褒也、雲楊雄也、」と。晋書王衍傳に「聖人忘情、最下不及情、」と。

古人云、名者公器、不可以多取、

以字、舊唐書にはない。莊子天運の文。ただし彼こにも以字はない。既竊時名、又欲竊時之富貴、使已爲造物者、肯兼與之乎、今之逆竊、理固然也、

逸周書官人解に「規諫而不類、道行而不平、曰竊名者也、」と。論

語衛靈公に「臧文仲其竊位者與、」と。莊子大宗師に「偉哉、夫造物者、」と。周易隨象に「係小子、弗兼與也、」と。述字、舊唐書は屯。細井本校語にも屯と。下文も同じい。周易屯象に「君子舍之、往吝窮也、」と。

況詩人多蹇、如陳子昂杜甫、各授一拾遺、而連剝至死、

周易蹇象に「蹇難也、」と。舊唐書陳子昂傳に「右拾遺、後授麟臺正字、」と。呂大防杜甫年譜に「至德二載丁酉夏、竄歸行在所、於鳳翔拜左拾遺、」と。魯書年譜に説がある。六典には拾遺に左右があり、從八品上と見える。周易剝に「剝不利有攸往、」と。庾信「和張侍中述懷」に「陽窮乃悔吝、世季誠屯剝、」ともある。

李白孟浩然輩、不及一命、窮悴終身、

李白二字、舊唐書にはない。恐らくはあるものが是。魏顥「李翰林集序」に「游海岱間、年五十餘、尙無祿位、」と。王琦李太白文集附錄文注に説があり、「白在天寶竟無官也、」ともいう。文集にも「李白墓」に「但是詩人多薄命、就中淪落不過君、」という。舊唐書孟浩然傳に「以詩自適、年四十來遊京師、應進士不第、」といい、「不達而卒、」ともいう。周禮春官大宗伯に「壹命受職、」と。

近日孟郊六十、終試協律、張籍五十、未離一太祝、彼何人哉、彼何人哉、孟郊は新唐書に「年五十、得進士第、調溧陽尉、」とあるが試協律の事は見えぬ。ただし、韓愈「登封縣尉盧殷墓誌」に「與諫議大夫孟簡、協律孟郊、監察御史馮宿好、」とある。試は唐會要「試及料濫官」に見え、協律郎は大典に正八品と。張籍は舊唐書本傳に「能爲古體詩、有警策之句、傳於時、調補太常寺太祝、」とある。文集「張十八」に

は「獨有詠詩張太祝、十年不改舊官銜、」と。太祝は六典に正九品上と。彼何人哉四字、舊唐書には重ねない。今雖謫佐遠郡、而官品至第五、月俸四五萬、

佐字、伍本馬本全唐文は在に作る。盧氏校正是佐、佐を是とする。文集「草堂記」にも「來佐江郡、」と。「江州司馬廳記」に「案六典、上州司馬、秩五品、歲廩數百石、月俸六七萬、官足以庇身、食足以給家、」ともいふ。

僕數月來、檢討囊裏中、得新舊詩、各以類分、分爲卷首、

裏字、伍本馬本全唐文は裏。盧氏校正是裏。盧説に従うべきである。

首字、舊唐書英華は目に作る。盧氏校正是目、目を以つて是とする。

北史採惠蔚傳にも「卷目雖多、全定者少、」と。なお陳寅恪元白詩箋證に此を引いて、卷で句とし、首字を下屬せしめるのは非。

自拾遺來、凡所適所感、關於美刺興比者、又自武德訖元和、因事立題、題爲新樂府者、共一百五十首、謂之諷諭詩、

適字、舊唐書は遇。林本校語にも遇。盧氏校正是舊唐書に従う。今盧氏に従い改むべきものとする。美刺の語は毛詩各篇の序に本づく。訖字、舊唐書は至。元稹に「和李校書新題樂府十二首」がある。又「樂府古題序」に「近代唯詩人杜甫悲陳陶哀江頭兵車麗人等、凡所歌行、率皆卽事名篇、無復倚傍、予少時與友人樂天李公垂輩、謂是爲當、遂不復擬賦古題、」という。文集には「新樂府五十首」がある。諷諭は文選班孟堅「兩都賦序」に「或以抒下情而通諷諭、」と。

又或退公獨處、或移病閑居、知足保和、吟詠情性者、一百首、謂之閑適詩、

獨處二字、舊唐書にはない。ないものは非。移字、舊唐書は臥。今は英華に従つて此を採る。漢書公孫弘傳に「弘乃移病免歸、」とあり、顏師古注に「移病謂移書言病也、一曰以病移居、」と。王先謙補注には「一説非、」と。通鑑宣帝元康二年、胡三省注に顏師古の説を掲げて「余謂前説是、」と。知足は老子三十三章に「自勝者強、知足者富、」と。保和は文集策林「策項」にも「是以恭默清淨之政立、則復朴保和、」と。本づく所は周易乾象「保合大和、乃利貞、」情性二字、舊唐書は倒する。毛詩序に「吟詠情性、」と。

又有事物牽於外、情理動於内、隨感遇而形於數詠者、一百首、謂之感傷詩、

物字、全唐文は務。明刻英華とともに誤。文集「寄李十一建」に「外事牽我形、外物誘我情、」と。一句は、文選嵇叔夜「養生論」の「心戰於内、物誘於外、」に本づく。理字、全唐文は性に作るが、これも明刻英華とともに誤。文集の用例は先に引く「祭微之文」にも見えるが、文鏡秘府論南卷「論文意」にも「體物寫狀、抑揚情理、」とある。一句は毛詩序「情動於中、而形於言、」に本づく。隨の下、語林本校に一本には於字があると稱する。あるものが順である。形於數詠は前引毛詩序に本づく。

又有五言七言、長句絕句、自一百韻至兩韻者、四百首、謂之雜律詩、

長句の語は、文集の詩題及び詩序に屢々見える。前に引く文の「懷舊感今、因酬長句、」の如く、自作についていう所は二十七條。その詩は悉く七言の八句以上のものである。又、他人の詩についていう所が八條あるが、その原篇も見得る限りは同じい。ただし、元稹元氏長慶

集律詩「使東川」の、その序「今所錄者、但七言絕句長句耳、」に據れば、此この長句も絶句に對し、後來の所謂律詩及び排律を總稱するものと察せられる。絶字、全唐文は明刻英華と同じく短に作る。文集に絶句の語も多く見えるが、短句をいうものはない。舊唐書に従い、絶と定める。自一百韻至兩韻七字、英華は自二韻至百韻六字に作る。

校語には「集作自一百韻至兩韻」と。文集卷十三以降の卷首に「自兩韻至一百韻」の語は多く見えるが、上に長句を先にし絶句を後にするから、姑く改めることをしない。雜律詩の語は文集以前には見ない。律詩の名稱については、錢大昕十駕齋養新錄、豐田穰唐詩研究に説がある。

凡爲十五卷、約八百首、

爲字、英華は一に作り、校語に「集作爲」と。

古人云、窮則獨善其身、達則兼濟天下、

孟子盡心の文。ただし兼濟を兼善に作る。風俗通窮通に孟子を承けて

「達則兼濟天下、」と。

大丈夫所守者道、所待者時、

孟子滕文公下に「行天下之大道、得志與民由之、不得志獨行其道、富

貴不能淫、貧賤不能移、威武不能屈、此之謂大丈夫、」と。周易繫辭

下に「君子藏器於身、待時而動、何不利之有、」と。

時之來也、爲雲龍、爲風鵬、勃然突然、陳力以出、

周易乾文言に「雲從龍、」と。莊子逍遙遊に「鵬之將徙於南冥也、水

擊三千里、搏風而上九萬里、」と。論語季氏に「陳力就列、」と。

時之不來也、爲霧豹、爲冥鴻、寂兮寥兮、奉身而退、

列女傳賢明陶答子妻に「南山有玄豹、霧雨七日、而不下食者何也、欲以澤其毛而成文章、故藏而遠害、」と。洪言問明に「鴻飛冥冥、弋何篡焉、」と。老子二十五章に「有物混成、先天地生、寂兮寥兮、」と。謂之諷諭詩、兼濟之志也、謂之閑適詩、獨善之義也、故覽僕詩、知僕之道焉、

志字、舊唐書は至に作るが、此こを優るとする。僕詩の下、舊唐書英華全唐文には者字がある。又、細井本に「覽ルモノ」と送る。古本に者字のあつた爲であらう。傳本の舊に従つて補うべきものとする。この末二句の發想は、「讀張籍古樂府詩」にも「所以讀君詩、亦知君爲人、」と見える。恐らくは孟子告子上「孔子曰、爲此詩者、其知道乎、」に倣うものであらう。

夫貴耳賤目、榮古陋今、人之大情也、

文選張平子「東京賦」に「若客所謂末學膚受、貴耳而賤目者也、苟有

智而無心、不能節之以禮、宜其陋今而榮古矣、」と。李善注に「桓子

新論曰、世咸尊古卑今、貴所聞賤所見、」と。又、江文通「雜體詩序」

には「貴遠賤近、人之常情、重耳輕目、俗之恒弊、」と。劉孝標「廣

絕交論」に「陽舒陰慘、生民大情、」と。

如近歲章蘇州、歌行才麗之外、頗近興諷、

文集「吳郡詩石記」に「貞元初、韋應物爲蘇州牧、房孺復爲杭州牧、

皆豪人也、韋嗜詩、房嗜酒、每與賓友一醉一詠、其風流雅韻、多播於

吳中、或目韋房爲詩酒仙、時予始年十四五、旅二郡、以幼賤不得與遊

宴、尤覺其才調高、而郡守尊、」と。才字、伍本馬本全唐文は清。盧

氏校正は才。文心雕龍樂府には「至魏之三祖、氣爽才麗、宰割辭調、」



と。

其五言詩、又高雅閑澹、自成一家之體、

文集「題道宗上人十韻」に「精潔霏戒體、閑澹藏禪味、」とも。末句

は史記太史公自序「以拾遺補藝、成一家之言、」に本づく。

今之秉筆者、誰能及之、然當蘇州在時、人亦未甚愛重、必待身後、然人貴之、

者字、伍本馬本は脱する。盧氏校正に補う。立野本も校増する。あるものが是。然人貴之の句、英華は同じい、伍本馬本全唐文には、然の下に後字がある。盧氏校正是英華に據つて後を衍字と定める。舊唐書は人始貴之に作る。唐詩紀事章應物に此を引いて然後貴之に作る。舊唐書を以つて順とするが、今は唐詩紀事に従い、人字を後に改めて、然後貴之に作るに止める。沈作誥補章刺史傳に「太和中、以太僕少卿兼御史中丞、爲諸道鹽鐵轉運江淮留後、年九十餘、」とあり、辛文房唐才子傳、吳修續擬年錄、豐田穰「章蘇州の詩」も従うが、恐らくは蔡啓蔡寬夫詩話にいうように劉禹錫「蘇州舉章中丞自代狀」に誤りがあるか、或は錢大昕十駕齋養新錄章應物及び章蘇州集に「同姓名而實非一人、」というものであり、此の文は章應物の歿後として讀まれたくてはならぬ。既に數年前の作に、「自吟拙吟什因有所懷」があり、中に「蘇州及彭澤、與我不同時、」とも見える。然千百年後、安知復無如足下者出、而知愛我詩哉、千百二字、舊唐書は倒。如字、英華全唐文は脱。知吾最要、率以詩也、

最要二字、舊唐書英華全唐文は罪吾に作る。林本細井本校語にも舊本

は罪吾に作ると稱する。罪吾とすれば、一句は孟子滕文公下「孔子曰、知我者、其惟春秋乎、罪我者、其惟春秋乎、」に本づく。ただし英華校語に「集作最要」といい、胡氏も異同を掲げぬから瞿本も此に同じいと察せられる。最要の語は、文集「答戶部崔侍郎書」に「終垂問以心地、此最要者、輒槩概言之、」と見え、「偶吟自慰」に「尊榮富貴難兼得、閑坐思量最要身、」とも見える。盧氏校正是罪吾を探り、單氏は最要を是とする。いづれにしても通じはするが、今、傳本の舊に據つて罪吾を探り、此を改めるべきものとする。

如今年春遊城南時、與足下馬上相戲、因各誦新艷小律、不雜他篇、

文集「題詩屏風絕句序」に「十二年冬、微之猶滯通州、予亦未離滬上、相去萬里、不見三年、」という。「十年三月三十日、別微之於滬上、十四年三月十一日、夜遇微之於峽中、停舟夷陵、三宿而別、言不盡者、以詩終之、因賦七言十七韻以贈、」に「一別五年方見面、相攜三宿未廻船、」という。元和十年八月に江州に向つてから、元和十四年三月忠州に向うまで、白居易は元稹に會つたことはない。會つたのは江州に到る直前の三月を最後とする。しかもその初に記した如く元稹が漸くにして京都へ歸つたのはその春である。此にいう春とは、元和十年のそれに限られる。城字、瞿本に成に作るの字。元稹「敘詩寄樂天書」に「近世婦人、暈淡眉目、縮約頭髮、衣服脩廣之度、及匹配色澤、尤劇恠黷、因爲豔詩、」と。此の艶も元稹のそれに類するものであろう。小律は文集「江上吟元八絕句」に「大江深處月明時、一夜吟君小律詩、」と。絶句の別稱である。

自皇子陂歸昭國里、迭吟遞唱、不絕聲者、二十里餘、

文集「代書一百韻」に「高上慈恩塔、幽尋皇子陵、」ともある。程大昌雍錄皇子陵に「在萬年縣西南二十五里、周七里、長安志曰、秦葬皇子、起家於陂之北原、故曰皇子陵、隋文帝改爲永安陵、杜甫詩曰、天寒皇子陵、」と。杜詩は「重過何氏」。昭國里は長安の坊名。元和九年十年に於ける白居易の所居。文集には「昭國里閑居」等がある。なお元稹の詩題に「爲樂天自勘詩集、因思頃年城南醉歸、馬上遞唱艷曲、十餘里不絕、」というものは此を指すものである。

樊李在傍、無所措口、知我者以爲詩仙、不知者以爲詩魔、

樊李は明かでないが、考うべきものに三がある。文集に「遊城南留元九李二十晚歸」の作があり、又「花前歎」に「幾人得老莫自嫌、樊李吳章盡成土、」と見え、原注に「樊絳州宗師、李諫議景儉、」と。更には元稹に「澧西別樂天博載樊宗憲李景信兩秀才姪谷」の作があり、當時交る所に樊宗憲と李景信がある。第一が近いと考えられるが、樊は明かでない。李二十は李紳。説は後に見える。詩仙の語は先に引く「吳郡詩石記」にも見える。詩魔は文集「裴侍中晉公以集賢林亭即事詩二十六韻見贈」に「客有詩魔者、吟哦不知疲、」ともある。

偶同人當美景、或花時宴罷、或月夜酒酣、一詠一吟、不知老之將至、

文選謝靈運「擬魏太子鄴中集八首序」に「天下良辰美景、賞心樂事、四者難并、」と。晉書孫綽傳に「沙門支遁試問綽、君何如許、答曰、高情遠致、弟子早已伏膺、然一詠一吟、許將北面矣、」と。知字、舊唐書は覺。論語述而に「樂以忘憂、不知老之將至云爾、」と。

雖驂鸞鶴、遊蓬瀛者之適、無以加於此、又非仙而何、

文選「別賦」に「駕鶴上漢、驂鸞騰天、」と。李善注に「張僧鑿豫章記

曰、洪井有鸞岡、舊説云、洪崖先生乘鸞所憩處也、鸞岡西有鶴嶺、王子喬控鶴所經過處也、」と。豫章記は江文通「從冠軍建平王登廬山香鑪峯」の李注では豫州記に作る。史記秦始皇本紀に「海中有三神山、名蓬萊方丈瀛州、僊人居之、」と。何字、伍本は誤つて和に作る。

此吾所以與足下、外形骸、脫蹤跡、傲軒鼎、輕人寰者、又以此也、

莊子大宗師に「修行無有、而外其形骸、」と。蹤跡の語は文集「池上二絶」の第二首に「不解藏蹤跡、浮萍一道開、」ともあるが、それにしても此の一句の意は詳かでない。後考を待つ。軒鼎は舊唐書張説傳に「台衡軒鼎、垂翻藻於當今、徽策寵章、揚芳蕤於後葉、」とも見えるが、出る所を明かにしない。

且與僕悉索還往中詩、取其尤長者、

且の下、舊唐書全唐文には欲字がある。あるものを順とする。

如張十八古樂府、李二十新歌行、盧楊二祕書律詩、竇七元八絶句、張十八は張籍。李二十は李紳。文集「江樓夜吟元九律詩」に「老張知定伏、短李愛應顛、」とあり、原注に「張十八籍、李二十紳、」と。張籍については「讀張籍古樂府」に「尤工樂府詩、舉代少其倫、」ともいふ。李紳については「編集拙詩成一十五卷」に「苦教短李伏歌行、」といい、原注に「李二十常負歌行、近見予樂府五十首、默然心伏、」ともいふ。盧祕書は、唐詩紀事竇鞏に盧貞と定めるが誤である。元稹「酬盧祕書詩序」に「予自唐歸京之歲、祕書郎盧拱、作喜遇白贊學士二十韻、兼以見貽、白時酬和先出、予草蹙未暇皇、頻有致師之挑、故篇末不無憤辭、其次用本韻習然也、」と見え、その詩は上平十灰の韻字を用いている。元稹のいう「酬和」は、文集に「時初奉詔除贊善

大夫、」との原注のある「酬盧秘書二十韻」に紛れはない。脚韻が上平十灰であり、その字は大半元稹のそれと同じいからでもある。盧秘書は盧拱である。楊秘書は楊巨源。文集に「贈楊秘書巨源」等の作がある。盧拱については先に引いた詩の中で「筆盡鉛黃點、詩成錦繡堆」ともいひ、楊巨源については先に掲げた作中に「不用更教詩過好、折君官職是聲名、」ともいひ。寶七は寶鞏。「東南行一百韻」の題に「寶七校書」と見え、詩中に「談憐鞏嘯喘、」という。細井本校語に舊本には句下に原注があると稱し、「寶七鞏善談諫、而口微吃、衆呼爲吃鞏、」という。元八は元宗簡。文集に「答元八宗簡同遊曲江後明日見贈」等の作がある。元稹に「酬寶校書二十韻」があり、中に「論文屬對全、賞花珠並綴」ともいひ、「見人詠韓舍人新律詩因有戲贈」に「七字排居敬」と見え、原注に「侍御八兄能爲七言絕句、」という。

博搜精緻、編而次之、號元白往還詩集、

號の下、舊唐書に爲字、英華に曰字がある。林本校語に金澤文庫本には爲字があると稱する。舊唐書に従つて爲字を補うべきとする。詩字、舊唐書にはない。

衆君子得擬議於此者、莫不踊躍欣喜、以爲盛事、

擬議は周易繫辭上「擬之而後言、議之而後動、」に始まる。文選魏文帝「典論論文」に「文章經國之大業、不朽之盛事、」と。

言未終而足下左轉、不數月而僕又繼行、心期索然、何日成就、又可爲歎息矣、

左轉は後漢書王堂傳に「坐公事、左轉議郎、」と。元稹左遷の事は前

に見える。下の而字、英華に脱する。白居易の貶謫の事は前に見える。心期は文集「祭李侍郎文」にも「言約則然、心期未獲、」と。歎字、舊唐書は太。

又僕嘗語足下、凡人爲文、私於自是、不恐於割截、或失於繁多、其間妍蚩、益又自惑、

上の又字、舊唐書にはない。自是は老子二十四章に「自見者不明、自是者不彰、」と。割截は南史江淹傳に「夜夢一人、自稱張景陽、謂曰、前以一匹錦相寄、今可見還、淹探懷中、得數尺與之、此人大恚曰、那得割截、都盡、」と。

必得交友有公鑒無姑息者、討論而割奪之、然後繁簡當否、得其中矣、交字、舊唐書は文。姑息は禮記檀弓上に「細人之愛人也、以姑息、」と。討論は論語憲問に「裨諶草創之、世叔討論之、」と。否字、馬本の不到に作るは壞字。

己尙病之、況他人乎、

之字、舊唐書は誤脱。

今且各纂詩筆、粗爲卷第、

筆字、全唐文は律。誤である。文集「白氏集後記」に「詩筆大小、凡三千八百四十首、」と。陸游老學庵筆記に、詩を以つて詩筆となす説を駁して、南朝詞人の例を掲げ、次いで唐代に及び「老杜寄賈至嚴武詩云、賈筆論孤憤、嚴詩賦幾篇、杜牧之亦云、杜詩韓筆愁來讀、似倩麻姑癢處抓、」と。杜牧之は「讀韓杜集」。ただし今本は筆を集に作る。

筆の義については、斯波先生「文筆考」に詳説がある。中に文心雕龍總述を引いて「今俗常言、無韻者筆也、有韻者文也、」と。又、文鏡

祕府論文筆十病得失を引いて「文筆式云、製作之道、唯筆與文、文者詩賦銘頌箴讚弔誄等是也、筆者詔策移檄章奏書啓等也、」と。此この詩筆とは有韻の文と無韻の文とを兼ねて、作品を總括していうものであろう。

又不知相遇是何年、相見在何地、溘然而至、則如之何、

在字、舊唐書は是に作る。至字、英華は倒に作り、校語に「集作至」と。伍本は致に作る。倒てはその義は明かとなるが露に過ぎ、致ては語を成さぬ。切韻（唐寫本殘卷）は溘を釋して至といひ、慧林一切經音義に溘然を掲げて至と訓じ、又、「楚辭曰寧溘死以流亡、王逸注云溘者奄忽而至、」と。至を是とする。

微之、微之、知我心哉、

微之二字、舊唐書には重ねない。

潯陽臘月、江風苦寒、歲暮鮮歡、夜長無睡、

歲暮二字、英華は終歲。文選陸士衡「苦寒行」に「夕宿喬木下、慘愴

恒鮮歡、」と。無字、舊唐書は少。

有念則書、言無次第、勿以繁雜爲倦、且以代一夕之話也、

舊唐書には、次第二字を餘次に作り、話の下に言字がある。

微之、微之、知我心哉、樂天再拜、

微之二字、伍本馬本全唐文は重ねない。盧氏校正に重ねる。今盧説に従う。